

あとがき

この本『画廊のしごと』は、私の画廊が今年三月で創立以来ちょうど十年を迎えるというくぎりの年であることを二年前から意識して準備し、出版されたものである。前著『私の画廊—現代美術とともに』（一九八二年四月刊）の続編である。

この本の内容は目次のとおりで、前半はこの本のために新たに書き下したエッセイ六編および一九八二年九月以降求められて雑誌等に寄稿したエッセイ六編（後記の初出一覧を参照）計十二編が収められている。後半は当画廊の展覧会カタログに私が書いた「あとがき」で、前著『私の画廊』に収録されているものを除き、それ以後現在に至る四十編（カタログ No.21-60）がカタログ表紙、作品図版等とともに収録されている。なお、この「あとがき」のうち「空間と空（そら）」および「ゴムシートの怪人」の二編は佐谷周吾の筆によるものであることを申し添える。

巻末には資料として当画廊の開催した展覧会の案内状（ポストカード）を第一回のマックス・エルンスト、イヴ・タンギー版画二人展（一九七八年九月一一-三〇日）から第八五回の「ピカソ・キュビズム全版画展」（二月一六日-三月五日）までの八五葉を収録している。すなわち当画廊はこの十年間に八五回の展覧会を開催しているのである。この間、展覧会カタログ六〇冊、ポスター一八点を作成している。また、この本に掲載した作品図版は数点を除き、すべて当画廊で取扱った作品を使用している。つまりこの『画廊のしごと』なる一冊の本は、当画廊十年の歴史を物語る画廊史とも言えよう。

私は生来美術が好きであった。そういう環境に恵まれて育ったと言える。私の生れ育った裏日本の舞鶴という町は、私の幼少年時代、活気のある海軍の軍港であった。海軍という国家権力のなせるところであるにせよ、鎮守府、工廠（造船所）、機関学校等があり、当時の新しい文物が流入し、新鮮で幾分ハイカラな空気に包まれていたのを今も私は感じている。

その町の家具屋の長男が、戦後すぐその町を出て、金沢、京都に遊学し、東京の銀行に勤めたが、生来の美術好きがこうじ、ささやかなコレクターになった。画廊を巡っているうちに、いまは亡き南画廊の志水楠男さんに出会い、二十年勤めた銀行を辞めこの美術業界に身を投じて十五年、ただいまは銀座で現代美術の画廊を営んでいる。とまあポイントをつまんで来歴を示せば以上のようなになる。このような来歴の男が、ちかごろ問題ではないか、気になるな、これは書き残しておかねば、と思ったことをとりまとめ、展覧会カタログの「あとがき」と併せこのように一冊の本に仕立上げたという次第で、時に著者は六〇歳というおまけがついている。この本は私の人生史のひとつのマイルストーンである。それを眺めていささかの感慨にひたっている私をもう一人の私が眺めている。

さて、このマイル・ストーンを後にして私の新しい旅が始まる。これから先、十年、二十年の後、どのような道筋を辿ることになるのか皆目見当もつかない。しかし私としては現代美術を取扱う画廊として、従来にも増して筋の通った、納得のいく「しごと」を、アクティブに、自分の出来得る限り進めていきたいと希っている。皆様のご支援をよろしく願います次第である。

最後にこの出版に当り、多くの人々のご協力を得た。お名前は特に記さないが、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

一九八八年三月二五日

佐谷和彦